

## 故山本陽三会員の人と業績

中村正夫

### (一) その死

周知のように山本陽三会員が亡くなりました。さる六月二十日のことでした。かねて入院中の国立病院九州がんセンターで転移性肝臓がんのためということでした。葬儀は一週後の二十七日、福岡市の斎場で挙行されましたが、生前の幅広い活動を反映して多方面からの参列者弔問者があり、まれに見る壮厳な式となりました。

行年は五十二歳、これからは本領発揮と期待されていただけに惜しまれてなりません。同会員は見るからに丈高く頑強そうで、知る人はその健啖ぶりと行動力が驚異でさえありました。よもやと思われた方が多いことと思います。そこであえて同会員の死去にいたる経過を報告させていただきます。

今にして思えば一昨年の七月頃、血たん様のものが出ると訴えられたのが最初の症状だったようです。実は同会員は幼児期、小児喘息にかかれ、以来ずっと持病として用心されていましたので、この時もいち早く近所の国立病院で精密検査をうけられました。その結果、肺門付近に薄いがかなり広汎な影があるというので、それが

既往症によるものかどうか、しばらく入院治療してみても経過を見るということでした。約一月して影もほとんど無くなりましたので、やはり過労による既往症の一時的な悪化だったのだらうとして退院、講義・講演・調査と旧に倍する忙しい日程の消化に戻られました。

一年後再び悪化、前回と同様すぐ国立病院に入院されました。しかし今度は経過が思わしくなかったらしく、病因不明という主治医のすすめで九州がんセンターに転院され、手術の運びとなりました。前年まで冗談めいて肺がんかも知れないなど漏らしていたのが、今回はそれが事実ということになり、本人もこの時にははっきり自覚されておりました。

幸いといきましょうか、いちおう手術は成功とされて、予後を含めて昨年の暮れまでに退院、やや瘦目は見えたものの一見元氣そうでした。今年の正月には快氣の祝をかねて山口大学のスタッフや卒業生、私なども加わって酒盃を傾けたようなことでした。以後日常に戻られたわけですが、再発予防のためと主治医の新ワクチン開発に協力するとあって、退院前からの注射を続けておられました。

しかし安閑としてはおれなかったようで、二回の入院の間にも山口大学文理学部改組の推進力となり、ことに社会学及び関連二学科実現の最後の仕上げ、科研費による沖繩共同調査の分担者としての現地行き、その他の業務が山積していました。私共が迂闊でした。ご本人の心よい承諾をいかに何かと無理を強いたのです。直接の引き金になったのが沖繩行き、今年三月協力者を連れて渡島されましたが、中途にして急に気分が悪くなったといつて帰宅、直ちに

入院、その儘不帰への路を辿られることになりました。

病魔そのものはもう抑えることができなくなっていたということ。外科医の義兄の方から伺ったところでは手術時すでに手後れだったとのこと、それにしても術後の無理強いが死期を早めたことは確かなのです。

このたびの入院ではすでに死を予期されていたようです。まだ動ける内にと写真を撮られ、山口大学のスタッフや教え子のそれぞれに蓄積された研究成果の出版その他の後事を托する遺言を克明に記しながら……。しかし転移した肝臓がんは意外に早く進行、五月下旬以降は日増しに絶望の淵に沈んで行かれました。

長い経過報告になりました。私自身の悔恨もさることながら、死病の訪れざまがどんなものであるか、を会員諸兄弟にも知ってほしかったからです。それがまた山本会員の遺志にも通ずるであろうと忖度したからに外なりません。

## (二) その経歴

山本会員は病床にあって死出の旅路を覚悟してから、おのれの生涯が辿った道行きを明示しておく必要を感じられたようです。物書きの根性ともいうべきでしょう。「山本陽三略歴」として葬儀の当日印刷して参列者に配布されましたが、その内容を要約して紹介してみましよう。

同会員は朝鮮総督府における農政関係の高官をされていた父君が大邸府の農事試験場長をされていた大正十五年の生まれ、間まなく

父君の転勤に伴って京城（現ソウル市）市に移られ、そこで小・中学校を終えられました。幼少時病弱のため途中休学などのこともあって終戦の年に該地の公立医専に進学されましたが、敗戦によって御家族共々郷里の福岡県久留米市に引揚げ、いったん地元久留米医専に転入学されました。しかし一念発起、あらためて父君の跡を踏むべく旧制高校進学を目指して退学し、昭和二十二年念願かなって第五高等学校に合格はしたものの学制改革によって廃校となり、九州大学に横すべりとなりました。

そのようにしてやや変則的なコースを進まれたため同期生の中ではかなり年長、したがって熟成も早く、五高時代から九大生の間は炭坑のトロッコ押しをはじめとする各種の雑業でアルバイト稼ぎに従事しながらも、心は文学にかなり傾注されておりました。すなわち火野葦平主宰の「九州文学」再建に参画して同人となり、さらにその分派「九州作家」に加わって創作を数篇発表されるなど、中には中央文壇で高い評価を受けたものもあって、当時新進作家の登場と期待されたものです。しかし専攻科目決定にあたり「たまたま私小説的な手法に疑問を持ち：直接社会を描く手法を模索していたので社会学に進学」されたということです。卒業論文もそうした作家的な目を通して、その頃米軍娼婦が特有に多数定住していた福岡市近郊の漁村部落を選ばれ、その理由を村落構造とのかかわりで分析しようとしたものでした。

またその間、西日本新聞の筆耕に携ったことも記しておいたがよいかと思えます。「毎日他人の新聞原稿を書き写したため、新聞記

事の書き方をマスターし、生涯の財産となった。」と述懐されていますが、あるいは学界活動より強いジャーナリズム志向は実にこの時期に胚胎したといえましょう。

山本会員の農村研究には、このようにして作家的ないしジャーナリト的な素地が一貫して底流をなして来たことを度外視することはできません。

昭和二十九年九大卒業と同時に大学院に進学し、内藤堯爾助教授（当時）に師事してイギリスの社会階層研究を当面のテーマとされました。もともと本来は新聞記者志望だったのが軽い肺結核がわかって絶念し、一転してアカデミズムへ、そして文学仲間だった奥さんとの結婚もこの年です。三十一年助手、その頃休職中だった喜多野清一教授が復帰され、直接その警咳に接するようになっていたくその学風に影響をうけ、以来ますます傾倒することになります。

とはいえ、農村農民への開眼はまだ後のことになります。昭和三十三年十一月山口大学講師（教育学部）に就任、やがて三十六年段階になって農業基本法の制定に伴う農業近代化政策が展開されることとなります。山口県でもご多聞にもれず、山本会員を起用してとくに「親子契約」（親子教室）の普及に当たられました。三十八年助教昇任、偶然にもこの年農村評論家松村志摩三氏との出会いがあります。氏は戦前における父君の旧部下だったという縁故もあって、その知遇をうけることになるのですが、これを契機として新生活運動協会・村づくり部会からの資金を得、松丸氏と帯同しての山本会員の農村見て歩きが始まり、山口県内を超えて急速に宮崎

・福岡の両県からさらには全国に及びます。

つまり研究者兼ジャーナリストという山本会員の二足のわらじ態勢がそれによって本格化するのですが、まず山口大学では四十年四月一日文理学部で配置換え、四十六年同教授、その後は文理学部の改組問題のプロモーターとなり、人文学部の新設と社会学及び関連二学科の実現及びそれらスタッフの布陣を終えるというところまで来ていました。

ジャーナリストとしては、ある意味ではもっと華々しいものがあります。実は昭和三十九年四月一日から四十一年六月十八日にかけて、九州圏内の大学教師の業績をインタービューする西日本新聞の「大学群像」欄を企画担当し、好評を得て前後四九六回にわたって連載し、その原稿料で自宅を新築するという放れ技をやりました。四十三年十月に「農村ジャーナリストの会」に加入してから農政評論家としてマスコミ各社、農業諸団体等の幹部との交流がとみに深まったようです。その間、四十四年三月には農政ジャーナリストの会第二回ヨーロッパ視察旅行参加、四十七年十月同会によるアメリカ農政事情視察、翌四十八年十月から五十年一〇月にかけて第一・三回派米農業青年アメリカンセミナー付添として渡米、そして五十年には社会主義農業研究会メンバーとしてソ連・東欧を視察し、かたわらポーランド、コペルニカ大学での第二回世界農村社会学会に出席するなど、外遊もしばしばでした。

なお四十九年十二月、農村評論家としての開眼のきっかけを与えた松丸志摩三氏が死去され、その志を継承すべく農民運動の小団体

「里の会」を創設、雑誌「里」（三号まで）の刊行に当たったことも付記しておきたいと思えます。

### (三) その業績

二足のわらじ、といえば、普通は決していい意味には使われません。しかし山本会員の場合、この言葉はずっと積極的な意義を持っていたように思います。つまり二者択一は角をためて牛を殺しかねない、研究者とジャーナリストが楯の両面をなしたというのが山本会員の境地であり、その意味で独自のジャンルを開拓しました。

あるいは開拓しつつあったといった方が適切かも知れません。射程内にあったとはいえ未完成の部分があり、結果として残された仕事はジャーナリスティックなものをはるかに多いからです。

新聞紙上での活動として目立つのは、さきの「大学群像」を別として四十二年から五十三年にかけての十一年間に、主として西日本新聞、朝日新聞、毎日新聞、中国新聞、熊本新聞、日本農業新聞等各紙に数回から十数回にわたり寄稿した農業関係の連載もの十四本があり、単発ものを加えると八百本にも達しています。雑誌原稿も約百八十本、連載ものとしては「農民組織を考える」（「地上」、四十五年七月・十二月号）、「風と土と人」（「農業協同組合」、四十六年一・十二月号）、「農協論壇時評」（「農協月報」、四十九年十二月・五十年十一月）、「集落を考える」（「果樹園芸」、五十一年一・十一月）があり、それらの内「風と土と人」は御茶の水書房より単行本として刊行されています。その外ラジオ・テレ

ビへの出演は無数に及ぶでしょう。

以上のようなマスコミ界における精力的な多方面にわたる活動は農政担当者や農業関係団体指導者の注目するところとなり、過去十年余の間に新生活運動協会中央委員、農業問題研究会議員、農政調査委員会委員、全国過疎地域対策推進委員兼全国過疎問題調査会委員などに推されました（県レベルは省略）。そして、そうした全国的な視野から現行農政のあり方をあらためて考えさせられ、またその影響が農村農民にどう及んでいるかの現実を目のあたりにするにつけ、山本会員はあえていえば一介の農村ルポ・ライターの域から脱皮する必要を痛感するにいたった感があります。わが村落研究会に積極的に参加し、山口大学で手塩にかけた若手研究者を引具して活発な研究報告を行うようになった背景には、そのようなことがあったと思われまます。

つまり単なるルポないし評論から、あらためて自分の理論的バック・ボーンを再構築する方向を模索するように転じたものと思われるのです。それには折にふれて恩師喜多野博士の示唆があったわけで、編著書「農山村開発論」はいうまでもなくそのための跳躍台とされたものです。

各種委員として行った調査研究の報告書や村研の年報への寄稿論文を通じて、その間における山本会員の軌跡はよく読みとれるものと思います。農・政調査委員会「日本の農業」シリーズ中、第一集「宮崎県「SAP」運動」（昭五二）や第一二二集「生産者と消費者を結ぶ」（昭五三）などは性質上どちらかといえはルポ調で

ですが、年報十三、四集の共同報告「イエとムラの伝統的価値感」及び「都市近郊農村における変化と現状」はそれぞれ明確な問題意識にもとづく主張でありました。

山本会員が社会学プロバラーの上で果たした仕事はもはや割愛しなければなりません。農村社会学ないし村落社会学に限っていえば、前にも申した通り研究者とジャーナリストが両棲したというところにまずもって特色があらうかと思えます。ただしどっちつかずの曖昧屋でなく、両面が相乗効果をもったということです。それは各種委員への就任ということもあって極めて現実主義的であり、現場発想的であったということはいえるかと思えます。そして臆面もなく標榜していたように農村改善事業に既存の日本農村社会学の理論的成果をどう役立てるか、したがってその姿勢を人は改良主義というかも知れません。また激動する現在の日本農村にあってイエとムラの共同性が農業の持続的発展にとって十分意味があるといった指摘から、復古主義的ないし農本主義的とする向きもあるでしょう。

しかし山本会員の本領は、そうした枠づけには一向こだわらない人でした。その点万事につけて楽天主義的で人見知りせず、自己流に発想し、何かを求めて走っていたと思えます。そのおよその見通しをつけるチャンスは農政調査委員会委員として昭和五十年から三年間たずさわって国土庁の農村集落基礎構造調査ではなかったと思えます。その間の年次報告書三冊を踏えて、昨年の手術前には五十三年度の農村集落調査票が完成していました。もし命あって、この調査票に精細なコメントをつければさながら格好の農村社会調査

書が容易に出来るし、またそれを土台に、これまで集積した資料を再体系化すれば、現代日本農村社会学といったものを導き出せるともいっていました。

それに今一つ付け加えておきたいのは、「農民」という範疇の確立を企画されていたことです。これは東西の農村事情を視察した上で Pessant の超体制的存在を確信し、比較研究に着手したいということでした。

このようにして学究としての自己完成に大きく一步を踏み出したのですが、非情な奪魂の使を引留めるすべはもはやなかったのです。

#### (四) その遺志

山本会員には育子夫人との間に長男伸浩君（農林中金勤務）、長女圭さん（大学生）、次男浩司君（高校生）があります。夫人には二子の育英という労苦がもろにかかることになりました。

それ以上に山本会員が後事を托したのは、これまで新聞・雑誌等に投じた寄稿文を整理し、あるいは諸報告書類をまとめて一本とし、出版したいということでした。あらためて集大成すればおのずから山本会員の意図したものが浮び上ってくるのではないのでしょうか。さしあたり山口大学の木下謙治会員を中心に準備が進められています。実施の運びとなりました場合には村研会員各位の物心にわたるご協力を得たいと思います。

山本会員はご承知のように西日本における村研活動の中核的存在であり、支部活動「イエ・ムラ研究会」のオーガナイザーでした。

本年度の第一回研究会は五月十二日、その時は病床から指示して大会へ参加してくれ、大会へ向けての準備にもおこたりのたのですが……。

暗夜失灯の思いということがありますが、結局は一同折角の北海道大会を失礼してしまいました。しかし今はあらためて支部活動を復活することが山本会員の冥福を祈ることにも通ずると思っっている次第です。